

28. 噴門癌に右結腸間置術を行なった2例

東 紀男, 天野勝弘 (国立横浜東)

食道にまで滲潤している噴門癌の2症例に対して, 胸下部食道切除, 及び胃全摘術を行なった。

再建方法として, 右結腸を用いて, 順蠕動的に, 食道十二指腸間に間置術を行なった。

結腸・十二指腸間の吻合には問題は全くなく, 食道結腸間の吻合は, 胸部下部食道切除のみでは, 緊張は全く認められず吻合が行なわれ, 術後の縫合不全, 縦隔洞炎, 肋膜炎等の合併症は見られなかった。

術後 Ba を服用させてみると, 1時間後にもまだ代用胃に Ba の停滞が見られ, 食物が徐々に小腸内に送りこまれるものと考えられる。

逆流性食道炎や, 自覚的, 他覚的な口臭等は見られず, さらに結腸が短くなったための下痢等も見られなかった。

29. Gambee 一層縫合の経験

中山 肇 (千大)
鈴木 伸典 (長野県立阿南)

本年6月以後の14症例に Gambee 吻合を施行した。うちわけは, 胃全摘3例, 胃切除9例, 腸切除1例で, それぞれに食道空腸吻合, 胃空腸吻合, 腸吻合を施した。縫合不全, 狭窄などの術後合併症は認めず, 術後X線写真及び術後内視鏡所見から, 生理的な癒合を確認し得た。

吻合手技の上でも, 比較的容易であり普遍性に富むという印象を受けたと同時に, 文献的考察からの吻合の合理性を確認した。

30. 当院における大腸 polypectomy の症例検討

—特に早期大腸癌について—

藤沢秀樹, 井上 育夫, 十川 康弘
大山欣昭, 瀬戸屋健三, 大和田耕一
(住友重機浦賀)

当院において過去1年間に施行した大腸ファイバーは36例に53回で, 進行癌3例, 粘膜下腫瘍2例, ポリープ16例を発見し, ポリペクトミーは8例に行った。内訳は, 早期癌3例, 腺腫3例, 化生性ポリープ1例, カルチノイド1例で, 早期癌はm癌2例, sm癌1例であり, sm癌では追加切除を行った。大腸ファイバーの技術の向上に伴ない, 診断と治療が同時に行われ得るポリペクトミーも比較的容易に行われるようになり, 我々も積極

的にこれを行ない, 大腸早期癌の発見に努めている。

31. 大腸の細胞診 (腺腫)

増田 裕, 小林祐輔 (増田病院)

対象: 大腸腺腫 (生検分類, Group 2, 3) についての塗抹細胞像を報告した。

Tubular adenoma: ①正常粘膜に比較して, 細胞配列, 核配列は乱れ, 重積性, 異形性が強い。②少数ではあるが, 舟状細胞を認め, 楕円形の核が扁平する。③PAS は陽性。

Villous adenoma: ①細胞集団としては tubular adenoma に類似する。②線維細胞が多く見られ, 核も線維状, 蛇状である。この疾患の特徴を示唆している。

32. 大腸癌の臨床病理学的検討

高木一也, 山野 元, 永野耕士
雨宮邦彦, 井原真都, 武田清一
(船橋中央)

昭和57年1月より昭和59年10月まで当院にて手術の行なわれた大腸癌58例 (61病変) を対象に分析を加えた。その結果 pm 以上の深達度となると42%にリンパ節転移があり, 又肝転移も認められた。一方腫瘍径2.1cm 以上では $n_{3,4}$ に転移をきたす可能性が高まり, かつ肝転移も来しやすい。従って $R_{3,4}$ の手術, 並びに肝転移を考慮した術中, 術後の化学療法の必要性があると考えられる。

33. 大腸癌再発と CEA

石川一郎, 藤田昌宏, 佐藤英樹
(千葉県がんセンター)

当施設の大腸癌切除症例は249例で, 治癒切除187例・治癒切除率75.1%である。治癒切除症例の追跡で, 41例21.9% (結腸癌89例中15例16.9%, 直腸肛門癌98例中26例26.5%) の再発がある。再発形式は, 局所再発19例, 血行性転移19例, 腹膜播種3例である。再発例の血清CEA 値の推移を見ると, 再発確認に先行して上昇する事が多く, 大腸癌切除例に対し術後追跡のマーカーとして測定する事は, 再発の早期確認に有用である。

34. CA 19-9 の臨床的検討—胆道疾患を中心に—

菊地紀夫, 斉藤 滉, 宮司 勝
斉藤 博, 筑摩明彦

(上都賀総合)

大塚孝司朗 (同・検査科)

糖鎖抗原 CA 19-9 の検討を行った。良性疾患では,